



森林鉄道の車両

情報誌「林野」では「森林鉄道」についてご紹介しながら、日本の林業の歴史や当時の様子をお伝えしていきます。第2回目は森林鉄道の車両についてです。



1. 魚梁瀬森林鉄道・魚梁瀬営林署 (和田山付近)

1 軌道から森林鉄道へ

森林鉄道車両の導入当初は、動力車をもたず、台車に木材を積み、制動手が手動でブレーキ操作を行いつつながら自重で山を下り、豆トロと呼ばれる軌道を用いました。空の台車は、山の上方まで、人力や畜力(馬などの家畜)で回送されました。やがて台車の回送にガソリンカーなどの小型動力車が用いられるようになり、更には木材を積載した台車の牽引そのものを蒸気機関車などの動力車で行う「鉄道」が建設されました。

森林鉄道における我が国初の蒸気機関車は、津軽森林鉄道用に、明治40年に青森県の蟹田棧橋に陸揚げされた、ポールドウィン製リアタンク蒸気機関車3両とライマ製蒸気機関車です。そして国有林で導入された蒸気機関車は、ポールドウィン、コッペルなどの外国製、雨宮製作所、協三工業、国鉄釧路工場など約200両になります。

ディーゼル機関車は、昭和3年に帝室林野局が上松運輸出張所に導入したドイツ製のものが最初でしたが、出力不足等のため、成果が挙げられない期間が続きました。戦後になると、昭和23年に野村組工作所製のものが馬路営林署に導入されたのをはじめ、加藤製作所、酒井工作所、協三工業製などの機関車が数多く導入され、蒸気機関車に置き替わり、ディーゼル機関車の全盛期を迎えました。

この他、主要な森林鉄道には職員輸送用の客車や機動的な職員巡視用の小型モーターカーがありました。また、王滝森林鉄道では、職員用客車列車の「みやま」号や町所有の学童通学専用列車の「やまばと」号があり定期運行され、さらに特殊な車両として、職員用の理髪車、皇族が利用したお召し車両も存在しました。



5. 仁鮎森林鉄道・能代営林署



4. 大畑森林鉄道・大畑営林署



3. 空「トロ」犬曳き・高知営林局



2. 内大臣林道・矢部営林署 (大正4年)

2 現存する森林鉄道

【現役の森林鉄道】

現役の森林鉄道は、国有林のものでは屋久島の安房森林鉄道及びそれ以外のものは京都大学声生演習林の森林軌道のみで、これら以外は全て廃止されています。

森林鉄道の動力車の保存状況

① 蒸気機関車

蒸気機関車では唯一動態保存されているものが、北海道丸瀬布営林署の武利森林鉄道で運行していた雨宮製作所製21号[※]サイドタンク蒸気機関車で、現在、丸瀬布いこいの森で観光用に客車を牽引し運行されています。

静態保存されているものは3両で、いずれも米国ボールドウィン製の[※]リアタンク蒸気機関車です。温根湯森林鉄道で運行していた2号機が東北森林管理局仁別森林博物館に展示されています。温根湯森林鉄道廃止に伴い、当時建設された博物館の開館に合わせて秋田営林局に譲渡されたものです。

同様に、群馬県に所在する森林技術総合研修所林業機械化センターには置戸森林鉄道で運行していた3号機が、長野県の赤沢自然休養林には小川、王滝森林鉄道で運行した1号機がそれぞれ保存されています。

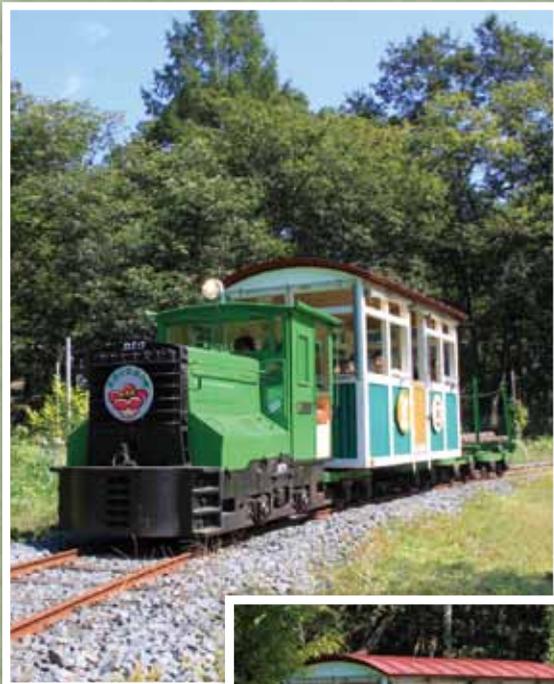


武利森林鉄道・丸瀬布営林署

② デイゼル機関車

ディーゼル機関車では、山形県真室川町「まむろがわ温泉梅里苑」の秋田営林署管内で運用されていた加藤製作所製4・8tディーゼル機関車、長野県南牧村野辺山のS.Lランドの上松運輸営林署で運用されていた酒井工作所製5t及び4・1tディーゼル機関車、高知県馬路村の円山公園の野村組製4・8tディーゼル機関車など、全国で7両が動態保存されています。なお、馬路村の馬路温泉前では、外観をポーター製蒸気機関車に似せた垣内製ディーゼル機関車が観光客を乗せています。静態保存車両の数は39両にも及びます。

なお、長野県上松町の赤沢自然休養林内を走る森林鉄道の路線は、小川森林鉄道の赤沢支線の路線を復元して利用されていますが、運用機は、北陸重機製の5tディーゼル機関車で、観光運行用に新造されたものです。



秋田営林署管内で運用された加藤製作所製4.8tディーゼル機関車（真室川町）



③ ガソリンカー、モーターカー

ガソリンカー、モーターカーでは、動態保存8両、静態保存6両が存在します。

（※）蒸気機関車を使う水タンクが運転席の後部に設置されているのが「リアタンク」、車両の両脇に設置されているのが「サイドタンク」です。